能御役人ニ可ニ相成一とさた仕候由。併當時ハ小普請組頭より被ニ召出一、一向殿中向は存不レ申候故、大に困ると申候さた御座候よし。

一　植溜ニて彦助講尺毎月三度ヅヽニ被ニ仰出一候由。尤奥向の面々ニて、其次男三男迄も志の御座候者ハ、罷出聽聞仕候様被ニ仰出一候由。

一　聖堂の講尺も日々四五十人程ヅヽ不レ絶罷出候よし。

一　左金吾ハ明ケ七ツ時より六ツ時迄之内を、おもに相廻り被レ申候よしのサタ。

一　同人町方ニてハいかふ悦び、町奉行よりハ評判よろしく御座候ニ付、始終ハ町奉行にならるゝであろふとさた仕候よし。

一　長谷川もまけずに愛を專度と相勤候由。無心中苦敷て成まい。おれがまけぬ様ニと勘らるゝであらふと申候よし。

一　本彈侯專御老中ニ可レ被ニ仰付一と沙汰仕候由。併一萬五千石でハ成まい。御老中ハ三萬石以上でなくてハ被ニ仰付一ぬから、一萬五千石御加增で被ニ仰付一であらふとさた仕候よし。

一　御先手阿部平吉組與力松山源左衞門　六十才位　人物能、御先手中ニての功者のよし。去夏米屋騷動之節、御先手十組加役被ニ仰付一候節平吉も被ニ仰付一候。其砌源左衞門存寄ニて同心共腰のもの大小を能吟味いたし、此度被ニ仰付一御加役は平常の御加役と違ひ、手向ひ候ハヾ切捨と被ニ仰出一候義ニ候へば、腰物が第一也とて、能々吟味いたし錺候ものなどはさゝせ不レ申候と申ス沙汰。

一　有馬玄蕃頭殿へ御鷹の鳥拜領之節、上使御使番井上圖書參候由。有馬ニて餅ぐわし并酒等被出候處、餅をも賞てくひ酒をも多く飲候由。只今迄ハ上使ハ一向飲食不レ仕候處、先方ニて差出候料理心を盡し候事ニ候。夫を賞玩致さぬハ無禮也とて、悉く餅酒共に賞玩いたし候由の沙汰。

一　御先手與力同心共一組不レ殘揃候て、半年共皆勤は無ニ御座一候ものゝ由。安部平吉組は當盆半年の皆勤書上候由。其後も只今迄與力同心共一人も引候ものハ無レ之候ニ付、此様子ならバ、當冬も皆勤御届被ニ差出一そふなものだと申候よし。

一　左金吾さし申され候大小ハ、緑頭ハ手向茶碗ニ椶の

花、目貫ニ位牌、鍔しやれかうべ、栗形が石塔、小柄ハ名號也と申候サタ。

一　長谷川ハ山師利口もの謀計ものゝ由。當春御加役中も、諏ハ淺草邊出火と申候へバ、筋違御門近邊ニも、自分定紋の高張二張ニ馬上てうちん四五張ももたせ人を差出し、淺草御門あたりにも同様にいたし、又火事場へも自分被レ參候ニ付、三ヶ所四ヶ所共、自分の挑灯あまた御座候ニ付、爰にも平藏がゐた、あすこにも平藏がいたといふ様に、不レ怪手廻しよく被ニ相思一候様ニ見え申候ニ付、町人共もくつと先ゝをとられ候由。尤其挑灯の御座候所にハ、與力か同心か居申候て高張御座候へば、頭も居候様ニ相見え申候て、町火消等も能差圖を受申候由。金銀の入候事ハ何共不レ存、人が挑灯ヲ三十張持候へバ、自分ハ五十も六十も持へ申候よし。甚ださへ過た事をいたし申候人故、あぶなきと申候ものも御座候よし。

一　先年田沼屋敷邊火事之節、長谷川平藏御城へ斷を申候て登城不レ仕、宅より直に田沼へ參り、御屋敷風並不レ宜候間、御奥向御立退被レ成候が可レ然候。私御案内可レ仕と、先へ立下屋敷迄案内仕候由。宅より出懸ニ本町の鈴木越後方へ餅菓子をあつらへ、右下屋敷へ參り候時分丁度參候様申付候間、早速右のくわしを差出申候由。宅へも若此火事大火ニ及候ハヾ夜食を持へ田沼の下屋敷へ持參可レ仕と申付置候間、右夜食も相廻り次向迄も振廻候よしニ付、どふいたして此様に手が廻つた事だと、田沼も甘心致候由。いまだ外よりハ一軒も何も不レ參候處、平藏より鈴木越後の餅も參り宅より夜食も參候よし。すべて此様ナル手の廻る事ハ奇妙に功者ニ御座候よし。

一　長谷川も、町々へ自分家來飲食其外無心申共、決して承知不レ仕候様、遂て申候ハヾ宅へ召連來候様ニと、觸を相廻候よし。

一　藥師寺ハ田舍侍にハあれ共、武邊ものかたき男だと、成ほど鐘ハ上手だそふだと人々申候よし。

一　西下ニて當夏大坂御城入之節、大御番羽太淸右衞門（御破損掛り相勤候よし）御先立仕候由。越中様江戸ハ勿論諸國共けしからぬ御評判の御人だから、嘸御こわい御顏色で御むつかしくあろふと存候所、思ひの外御器量もよく、まだ御廿位ニ御見え被レ成、其辭御和らかな御方で、御言語抔も御丁寧に御柔和ナ事であつたが、御眼中のするどさ、け